

学 位 論 文 題 名

韓 日 比 較 を 中 心 と し た 都 市 居 住 地 に お け る 住 民 の
緑 意 識 と 評 価 に 関 す る 研 究

－ 大 邱 市 と 札 幌 市 を 事 例 と し て －

(A comparative study on the assessment of greenery
by the inhabitants of urban residential areas in
Daegu, Korea and Sapporo, Japan)

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

住民の緑意識を用いて緑を評価する場合、歴史的、文化的、社会的環境条件を異にする地域においては住民の意識はもちろん、その地域の中に存在する緑の量的、質的、空間的分布状況は異なることが予想され、住民の緑に対する満足感へ及ぼす影響も異なると考えられる。

本研究はこのような背景から日本の札幌市と韓国の大邱市の都市居住者の緑意識、特に緑計画のベースとなる評価に関する意識を明らかにし、同時に、比較を通じて両国における独自性や普遍性を明らかにしようとするものである。以下、本研究で得られた主な結果を要約する。

1) 第1章、第2章ではこの研究の目的と意義、本研究で行ったアンケート調査の概要などを整理した。

2) 緑関連用語の連想反応による意味の分析(第3章)

両市共に「緑」「緑地」に対しては「木、樹木」などの植物を中心としてイメージされているが、韓国では「緑:Pureum」が十分に住民の共通認識として定着しているとはいえないと考えられた。また、「公園」に対して、大邱市では大公園を、札幌市では児童公園をイメージしており、両市の公園の整備状況の相違が反映していると推察された。また、韓国と日本での専門用語としての緑地と両市の住民にイメージされる緑地とは相違がみられ、住民のイメージでは緑被地に類似していた。

3) 緑に対する住民の意識(第4章)

住民の緑に対する機能の認知では、大邱市では「都市美観」、札幌市では「自然性」に関する比率が高く、また両市住民の緑整備志向をみると、大邱市では公園と共に都市緑化に対する要望が高く、札幌市では自

然の保全に関する項目がより多くなっていた。また、大邱市では「公園、緑地」が社会的関心領域の一部であるが、国の政策、政治との関連が強く、同じ社会的関心領域でありながら、環境問題と強く結び付けられていた札幌市とはやや異なっていた。また、大邱市では一部特定な人が高い関心をもっているが、一般の多くの人の関心度は札幌市より低いことが明かであった。また、両市の緑の満足度に関する属性の影響は両市共に居住地区が最も強いが、この要因以外にも大邱市では庭の所有面積、札幌市では年齢、職業、世帯収入、庭の所有面積がやや強くなっていた。

4) 緑満足度における緑の種類別影響 (第5章)

大邱市での調査結果から緑の認知度では「居住地区」の影響がかなり強く、緑の満足度には「庭の緑」「公園の緑」の認知が強く影響しているが、庭の有無による違いも大きく、現状の緑の環境が緑の認知度や満足度に強く影響していると考えられた。また、札幌市の結果と比較してみると、ほぼ類似していた。さらに、大邱市では住民が直接求めている緑は「庭の緑」が最も多く、続いて「公園の緑」「山、丘陵の緑」であり、実験計画法による緑の評価には、「街路樹の有無」「庭の有無」の影響が強いなど、「庭の緑」がかなり強く影響していると考えられた。この実験計画法での「街路樹の有無」の影響は「理念上」と「現実上」の違いによるものと考えられた。また、実験計画法による緑の評価の内、公園や山に対しては距離の影響が強くみられ、その利用性が評価に強く影響していた。

5) 緑の評価における身近な緑 (第6章)

札幌市での調査結果からみると、身近な緑として庭(自宅・他家の庭)は調査地区に関係なく想起されていたが、全体としては公園や自然の緑の想起率が高くなっていた。身近な緑として想起される公園までの距離は、小規模公園の場合は150mまで、大規模公園では1000mまでが強い影響圏とみられた。また、身近な緑として想起されるか否かは、距離のみでなく、利用度、認知度にも大きく影響されると考えられる。

6) 住宅地街路景観構成及び緑の評価 (第7章)

大邱市と札幌市における住宅地の街路景観構成の比較では、大邱市は札幌市より塀の比率が高く、空、自然要素(緑)の比率が低い。また、緑の満足率と全緑視率との関係では札幌市においては明確な対応関係がみられたが、大邱市ではみられなかった。一方、写真による景観評価においては、韓国人学生と日本人学生の間に多くの尺度で有意差がみられ、

韓国人学生同士では有意差のある尺度が少なかった。特に、両国の学生の間で「清潔な」「個性的な」「古風的な」のイメージには大きな相違がみられるとともに、景観の好みに関しては他国の景観に対して相対的に高く評価していることがわかった。しかし、街路景観評価における緑の役割は両国共に重要な因子であることが明らかになり、その評価構造はグループ間の相違が少なく、「整然性」、「活動性」と「魅力性」あるいは「自然性」によって構成されていると考えられる。

7) 居住地における住宅地の構成と住民意識(第8章)

大邱市での調査結果から、住宅敷地内に樹木を存在させるためには敷地面積が最低151㎡必要で、201㎡以上が望ましく、非建築面積81㎡以上が必要であり、日本の都市における調査結果とほぼ類似していた。しかし、同一敷地面積内に存在する樹木数は、札幌市や他の日本の都市より大邱市でかなり少ないことがわかった。また、大邱市での調査結果から、住民が希望している「庭」の面積は61㎡以上と考えられ、この面積は札幌市での調査結果よりかなり狭い。また、庭に対する満足度、マダンを必要とする理由、希望する庭面積などに対しては、学歴、住宅所有関係、敷地面積など比較的多くの項目が影響していた。

8) 総合考察(第9章)

緑に対する意識を全体としてみると、都市化された環境や生活様式を背景にして両国に共通した部分が多いが、一部では都市化の進展、経済的背景の違いや歴史的、文化的な違いが影響していると考えられる。例えば、経済的発展や都市化が先行した日本では緑に対する関心度がより高いこと、さらに韓国では緑の利用性に対する要望が強いが、日本では利用性と共に緑との触れあいのような自然特性に対する要望も強いことなどである。これらの違いが緑の満足度や種類別緑の評価にも影響していると考えられた。また、居住地の緑環境評価の指標としての緑視率の適用には、街路の緑視率を形成する緑の種類、住宅敷地の構造的な相違など、文化的な背景が影響し、韓国ではそのまま用いることは困難と推察された。

また、今後の韓国における居住地の緑計画に関して、既存の制度と住民意識を考慮しつつ、住宅敷地内の私的な緑、公園、街路樹などの公的な緑、さらに住宅地の街路景観の改善に関する提案を行った。

学位論文審査の要旨

主査	教授	筒井	澄
副査	教授	伊藤	浩司
副査	教授	足達	富士夫
副査	助教授	浅川	昭一郎

住民の緑意識を用いて緑を評価する場合、歴史的、文化的、社会的環境条件を異にする地域においてはその地域の中に存在する緑の量的、質的、空間的分布状況が異なることはもちろん、住民の意識も異なり、その意識は住民の緑に対する満足感へも影響すると考えられる。

本論文はこのような背景から札幌市と大邱市の都市居住者の緑意識、特に緑計画のベースとなる評価に関する意識を明らかにし、同時に、比較を通じて両国における独自性や普遍性を明らかにしようとして行われた。第1章、第2章ではこの研究の目的と意義、本研究で行ったアンケート調査の概要などを整理し、第3章から第8章までは結果と考察、第9章は総合考察である。主要な結果は以下の如くである。

1) 緑関連用語の連想反応による意味の分析(第3章): 「緑」「緑地」に対しては「木、樹木」など、植物を中心としてイメージされ、両市は類似しているが、「緑: Purerum」に関しては、韓国では十分に住民の共通意識として定着しておらず、「公園」に関しても、両市の公園整備状況の相違が反映していると推察された。

2) 緑に対する住民の意識(第4章): 緑の機能に対しては、大邱市では「都市美観」、札幌市で「自然性」に関する認知の比率が高く、緑整備志向については、大邱市で公園や都市緑化、札幌市で自然の保全に関する項目がより多くなっていた。また、大邱市では一部特定な人を除くと、一般の多くの人の緑への関心度は札幌市より低いことが明らかであった。

3) 緑満足度における緑の種類別影響(第5章): 両市における緑の認知度では「居住地区」の影響がかなり強く、緑の満足度には「庭の緑」「公園の緑」の認知が強く影響し、庭の有無による違いも大きく、現状の緑の環境が緑の認知度や満足度に強く影響していると考えられた。さらに、大邱市では住民が直接求めている緑の種類を明らかにすると同時に、実験計画法による緑の評価を行い、現状では必ずしも顕在化していない「街路樹」への要求が「理念上」ではかなり強く求められていることを示した。また、公園や山については、その利用性が評価に強く影響することを明らかにした。

4) 緑の評価における身近な緑(第6章):札幌市での調査結果からみると、身近な緑としては庭、公園、自然の緑の想起率が高く、公園の影響圏は小規模公園の場合は150m、大規模公園では1000mと推察された。

5) 住宅地の街路景観構成および緑の評価(第7章):両市における住宅地の街路景観構成要素をみると、大邱市では札幌市より塀の比率が高く、空、自然要素(緑)の比率が低い。また、緑に満足する比率と全緑視率との関係では、札幌市においては明確な対応関係がみられたが、大邱市ではみられなかった。一方、写真による景観評価においては、韓国人学生と日本人学生の間に多くの尺度で有意差がみられ、文化によって差が生じることを示唆した。しかし、街路景観評価における緑の役割は両市共に重要な因子であることが明らかであり、その評価構造にはグループ間の相違が少なく、「整然性」、「活動性」と「魅力性」あるいは「自然性」によって構成されていると考えられた。

6) 居住地における住宅庭の構成と住民意識(第8章):大邱市での調査結果から、住宅敷地内に樹木を存在させるためには敷地面積が最低150㎡必要で、200㎡以上が望ましく、また、非建築面積80㎡以上が必要であると推定され、日本の都市における調査結果とほぼ類似していた。しかし、大邱市での調査結果から、住民が希望している「庭」の面積は60㎡以上と考えられたが、この面積は札幌市に比べかなり狭い。

7) 総合考察(第9章):緑に対する意識を全体としてみると、都市化された環境や生活様式を背景にして両国共に共通した部分が多いが、一部では都市化の進展、経済的背景の違いや歴史的、文化的な違いが影響していると考えられる。例えば、経済的発展や都市化が先行した日本では緑に対する関心度がより高いこと、さらに韓国では緑の利用性に対する要望が強いが、日本では利用性と共に緑との触れあいのような自然特性に対する要望も強いことなどである。これらの違いが緑の満足度や種類別緑の評価にも影響していると考えられた。また、今後の韓国における居住地の緑計画に関して、既存の制度と住民意識を考慮しつつ、住宅敷地内の私的な緑、公園、街路樹などの公的な緑、さらに住宅地の街路景観の改善に関する提案を行った。また、居住地の緑環境評価の指標としての緑視率の適用に際しては、街路の緑視率を構成する緑の種類、住宅敷地の構造的な相違など、文化的な背景を考慮すべきである。

本論文は都市住民の緑に関する意識を日韓の比較を通じて多面的に分析し、緑地計画に極めて有効な知見を与えるものであり、さらに大学院課程における研鑽や取得単位から、審査員一同は、申請者が博士(環境科学)の学位を受けるにふさわしい資格を有するものと判断した。